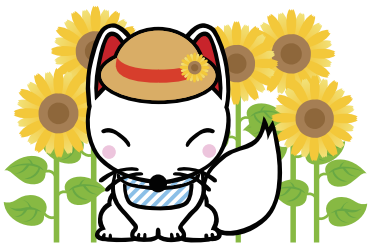

はくび通信

Year 2016年
Summer 夏号

日本のお盆

夏に迎える伝統的仏教行事

先祖供養、お盆の由来

夏もいよいよ本格的な猛暑を迎え、街には毎日蝉の鳴き声が響き渡っています。八月も半ばになるとお盆を迎え、親族縁者が集まりご先祖様をご供養いたします。

お盆の由来は仏教の経典に書かれている「盂蘭盆経」(うらぼんきょう)という伝説が元であるとされています。お釈迦様の弟子である目連尊者(もくれんそんじゃ)が、餓鬼道(がきどう)に落ちて苦しむ母親を救おうとし、お釈迦様の教えに従い七月十五日の自恣(じし)の日(夏季の三か月の修行の終わる日)に修行を終えた僧たちに食べ物を施し供養したところ、その僧たちの偉大な功徳によって母親を救うことができたといわれています。

日本のお盆の始まり

日本でのお盆の歴史は、六百六年推古天皇の時代までさかのぼります。民衆の間に定着し現在の盆供養が行われる様になったのは江戸時代になってからのことです。

自恣(じし)の日である七月十五日を中心にお盆は行われてきました。のちに新暦が採用されるようになり、旧暦を新暦に置きかえ八月中旬に行う様になりました。しかし、旧暦を新暦に置きかえると、毎年違う日になってしまいます。そのため親族が集まりやすくゆっくり皆でお盆供養が出来る様に「月遅れ盆」とし、七月十五日からちょうど一か月後の八月の十五日に行うお盆供養が定着してきました。

この様に、一般的には八月十五日を中心としたお盆供養を行う地域が多いですが、関東地方や、萬松寺近辺では瀬戸市や南知多など一部の地域では七月盆といい、新暦の七月十五日を中心に盆供養が行われます。また、身内の方が亡くなって初めてのお盆を「初盆」といいます。四十九日が過ぎていない場合は、翌年がそれに当ります。初盆には親族が提灯を送るしきたりがある地域もあるそうです。

盆供養の仕方は、各地で様々ですが、盆棚(ぼんだな)、精霊棚(しょうりょうだな)というお供え物を並べた棚をつくり、そこに祖先の霊を招き僧侶に棚経(たなぎょう)というお経をあげてもらい、墓参り、寺参りをし、迎え火・送り火を焚きます。また、盆踊りもお盆の行事の一つです。

ご先祖様を迎え送る 迎え火・送り火

お盆の始まりと終わりに行う、迎え火・送り火。お盆供養の際、ご先祖様をお迎えする迎え火では、玄関や縁側・庭先を掃除して、たらい(足すすぎ)や洗面器に冷たい水を入れ、手拭いを用意し松明(たいまつ)を焚いてご先祖様をお迎えします。ご先祖さまはその火の明かりを目印に、煙に乗って帰っていらっしゃいます。お帰りになる際の送り火でも同様に、松明の火を焚いて、ご先祖様の帰る道を照らすのです。

しかし、現代のマンションなどの住宅事情では、玄関先やベランダで火を焚くことは、現実として難しいことです。その場合は、盆提灯がその代わりを務めます。盆提灯は家紋や絵柄の入ったものを飾りますが、初盆の時だけは新盆用の白提灯を飾ります。

◆境内にて松明を焚いて行う「迎え火」の様子。

なるほど仏教

施食会（せじきえ）

施食会とは

施食会（せじきえ）という、仏教行事を皆様ご存じでしょうか。施食会は通常お盆の前後の時期に行われます。

施食会はお釈迦様の弟子である阿難尊者（あなんそんじゃ）と餓鬼（がき）の話が元となっています。ある日、餓鬼が阿難の修行中突然現れ、「お前は三日後に死ぬ。そしてお前も餓鬼に生まれ変わるだろう。」と言い放ちました。

阿難は餓鬼からの言葉を恐れ、それを免れる方法をお釈迦様に問いました。そんな阿難にお釈迦様は言いました。

「餓鬼界にいるたくさんの亡くなった人々に食べ物を与え、心を込めた供養をしなさい。」阿難はお釈迦様の教えに従いきちんと供養を行いました。この供養が届き、阿難は餓鬼の難を逃れ、寿命を延ばすことができました。

餓鬼を救うお経「甘露門」

仏教の世界では没後、生前の行いによって生まれ変わる場所が異なると考えられています。その場所の総称を六道といい、「地獄（じごく）」「餓鬼（がき）」「畜生（ちくしょう）」「修羅（しゅら）」「人間」「天上（てんじょう）」の六つに分かれます。その中で生前、強欲で嫉妬深く常に貪欲な気持ちや行為を行った人が餓鬼となり、餓鬼道に属します。

餓鬼は喉が針のように細く、飲食物を手に取り口に入れようとすると燃えてしまい飲食できません。よって、常に飢えと渇きに苦しみます。

そんな餓鬼を救うために「甘露門（かんろもん）」というお経を施食会では読みます。餓鬼にお供えする、「水の子」※2（生米とサイの目に切った茄子と胡瓜を混ぜ、水に入れます）を用意します。水に入れることにより、食べ物が燃えてしまうのを防ぎます。そして甘露門を読み上げると、お経の力によって水の子がとてもたくさんの食べ物に変わり、針のように細い餓鬼の喉を広げ、食べ物を食べられる状態にします。

このようにして、餓鬼道に堕ち苦しんでいる亡くなった方々を供養します。

◆※2お盆供養でお供えする「水の子」。

施食会の心得

自らの欲深さを反省し、亡くなった人々や仏法僧（お釈迦様・お釈迦様の教え・僧侶）に感謝を伝えるために食を施すという「布施の気持ち」（見返りを求めず相手に与える）が趣旨となった仏教行事です。

皆様も施食会を通じ布施の精神を知り、それを行うことによって「福徳延寿（ふくとくえんじゅ）」（幸せに長生き）が得られることでしょう。

◆昨年の施食会の様子。

萬松寺 れぽーと

萬松寺の七夕（ばんしょうじのたなばた）

～旧暦で過ごす、伝統的七夕～

旧暦の伝統的七夕

毎年、萬松寺では旧暦に基づいた、伝統的な七夕を行っております。

旧暦とは明治五年以前に使われていた、太陽と月を基準とした太陽太陰暦で、潮の満ち引きや四季、気象、自然に一番直結した暦ともいえます。現在の新暦は旧暦より、日程が一か月程早く、梅雨時期に当たり天候に恵まれないことが多いのです。しかし、旧暦は新暦より日程が一か月ほど遅いため、梅雨は明け、晴天に恵まれやすく、星の高度も上がるので、天の川がきれいに見えることが多いのです。伝統的な旧暦を見直す為にも、萬松寺では旧暦を大切にしています。

◆たくさんの短冊で賑わいをみせる新天地通り。

願いを込めた色とりどりの短冊

七夕は織姫と彦星が一年に一度の再会を許された日であり、短冊に思いを込め、願いを綴ると願いが叶う日とされています。

今年、萬松寺では境内前一面に広がる笹や天の川、たくさんの七夕飾り、色とりどりのオリジナルの和柄短冊で飾られた七夕世界が広がっています。夕刻には夜空からも短冊が見える様にたくさんの提灯で照らします。

和柄短冊は十五種類あり、参拝者にお好みの短冊をお選びいただき願い事を奉納して頂きます。そして、今年は夏らしい涼しげな音を奉納していただく風鈴短冊もございます。

皆様に奉納して頂いた短冊は、旧暦七夕の当日に萬松寺の祈祷会にて祈祷致します。

萬松寺の七夕（ばんしょうじのたなばた）

～旧暦で過ごす、伝統的七夕～

▶8.9（火） 七夕祈祷会（たなばたきとうえ）